

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2010年8月-2010年9月

ノルウェーから帰国後5日で、再びフランスに飛ぶ。怒涛の8月が終わると、ロゲイニング、オリエンテーリングシーズンがやってくる。しばしのランナー気分。

■ノルウェーの森

8月6日

ノルウェーに向けて出発した。飛行機では2時間爆睡したが、ストップオーバーのコペンハーゲン到着後は疲労が強く、20分の軽いジョグすら体が持たなかった。翌朝はダルさと熱っぽさで目覚める。第二の祖国ノルウェーに行けるというワクワク感よりも、いくつかの会議と日本チームのためのコース設置の仕事が全うできるかの不安感が強かった。明日にでも帰国したくなりそうだった。ノルウェーの森をみると少しだけ落ち着いた。

8月8日

世界選手権が開幕する。郊外にあるスプリント予選会場の民家園まで利佳ちゃんと歩いてでかけた。エキサイティングな演出がなされていたが、残念ながら日本チームの予選通過はなし。

その後、西郊の森で行われるテストレースの設置に出かけた。ノルウェーの地図でコースを組む機会はいくらでも作れるが、それを実際に設置して、トップ選手が走るという経験は生涯二度とできない経験かもしれない。2時間ほどで設置を終え、仕事とも言っていいこの旅行の、中でも最大の重責を果たした。

普段バスのないこのトレインだが、週末はハイキングバスよろしくバスが運行される。いかにもハイキングを終えた地元の人たちと一緒にバスに揺られながら、路線バスによってトレインに通った96年のノルウェー遠征のことを思い出した。

8月9日

「母国」の空気を吸って、日ごとに体調は回復した。最初のレースであるこの日は朝から覚醒してレース仕様。キロ当たり8分という結果も、久しぶりのノルウェーにしてはまずまず。それをのり越える必要性のない安堵感と寂しさが交錯する。



第二の故郷ノルウェーのドブレフェレにて

8月11日

この日は街中での併設スプリントが開催されたが、O-mapについての国際会議ICOMが開催されていたので、そちらに出かけた。9時から16時までのセミナーの話題のほとんどはレーザー測定のベースマップによる地図調査の話だった。いまやレーザー測量にあらざば地図にあらざ、といった勢いだ。

その後、VIPレースに出かける。VIPとは名ばかりで、そのレベルはそんなところの大会をはるかに凌ぐ。優勝すれば世界選手権の予選通過は確実だ。1990年代後半、競い合ったウィルに追い付かれた。向こうは「シン、グッドレース！」という余裕を見せた。ゴールして握手すると、「あのころみたいだね」などと言われて、同窓会気分。ちなみに現役時代には世界チャンピオンで雲の上だったノルウェーのトレ・ザグボルデンには圧勝した。長く続けていればいいこともあるのだ。

8月13日

併設を欠席してIOF総会に参加した。今回で20年を超えるIOF理事や副会長の座を降りるオーストラリアのヒュー・カメロンがゴールド（黄金）ピンというIOFの中でも最高の栄誉である表彰を受け、会場のスタンディング・オベーションを受けた。2000年の世界選手権立候補のプレゼンテーションをはじめとして、ことあるごとに僕らのことを気かけ、韓国や日本でのアジア選手権にもIOFの代表としてやってきた彼が引退するのは、時の流れとは言え、さびしい。

8月16日

世界選手権の後、二日ほどりかちゃんとノルウェーの山歩きを楽しんだ。4年ぶりのノルウェーなのに、つい最近きたばかりのように思える。30年前の初遠征の時、ロフォーテン諸島から列車でひたすらウィーンを目指したとき、車窓から見た風景を求め、トロンハイムから150kmのところにあるドブレフェレのスノーヘッテという山に登った。

最後の夜は、30年来の友人の家に寄った。ウィーンを目指す途中の列車の中で偶然言葉を交わし、いかにも貧乏旅行者に見えた僕にサンドイッチを分けてくれた彼女は、その後も僕を息子のように可愛がってくれた。彼女がいなければ、僕はこれほどノルウェーに親近感を抱くこともなかったし、思い出に残る97年の世界選手権の成功もなかったかもしれない。そんなことを考えながら、彼女と抱擁して別れた。



ノルウェーの「母」ライドン

8月21日

村山口で、全日本に向けての地図調査基準合わせをロブ、羽鳥、中村を交えて行った。今回の調査に消極的だったロブが、数日前興奮気味にメールをしてきた。「とにかく(原因が)すごい! 少なく見てもこれまでの半分の時間で調査ができる。」

ヨーロッパで大流行のレーザー測量原図を富士山を専門に研究する同僚のつてをたどって手に入れ、それを投入したのだ。等高線を見るだけでもそのすごさは分かるが、実際に山の中に入って、改めてそのやばさを実感した。地形情報は余すところなく表現され、歩測やコンパスワークが全く不要なのだ。こんな地図で調査をしたら、普通の原因での調査をやる気がうせてしまいそうだ。

8月24日

午後発の KLM 便に乗るために成田へ向かう。2月前に NHK のディレクターから「ウルトラトレイルデュ・モンブランを取材する。お手伝いだけできないか」という打診があった時、ノルウェーから帰って5日後の再渡航というタイトなスケジュールの中での体調に自信がなく、答えを保留していた。

ノルウェー遠征の直前にだめ押しが来て、渡航を決めた。僕をよく知る周囲の女性たちにはことごとく「ばか」呼ばわりされた。でも、時にトレランイベントも主催する自分にとって、いけない理由は何もない。

8月27日

トレラン界の最高峰レース、UTMB スタートの日である。この1年間トップを目指した鍋木さんら日本人の緊張と興奮は計り知れないが、取材にあたる僕たちの間にも緊張がみなぎっていた。スタートは18:30だが、16時には落ち着かない気分になる。スタート撮影で先にでかける同室の六花さんが、「がんばりましょう!」と握手を求めて出て行った。

この二日間は選手同様夜通し走る過酷な状況での取材となる。天気は崩れ、最大で15-20m/sの風も吹き荒れる、いったん回復した天候は二日目の晩には再び崩れるという。標高2000m以上の峠をいくつも越えるこのレースは、さらに過酷なものとなるはずだ。

スタート30分前からスタートレーンに入って、選手の様子を撮影する。選手の間でスタートを待ち、今大会の主題歌とも言えるヴァン・ゲリスの「パラダイスの征服」を聴いていると、自分も選手の一人になったような錯覚に陥る。

本格的な山道となるノートルダム・ド・ゴルジュで30分ほど支度をして、定点カメラマン矢嶋さんとそのアシスタントの3人で、小雨の降る中を峠に至る途中の山小屋に向けて歩き始めた。雨だということに、応援の観客が三々五々、峠に向かっていく。途中の山小屋では、花火を打ち上げお祭り気分だ。ツール・ド・フランス(自転車レース)の峠越えの様子が思い浮かぶ。

定点カメラマンは撮影ポイントを定めるが、その位置では変化のある走行風景が撮れないと感じて、僕はもう少し峠に向けて上がることにした。雨はだいぶ強くなっていった。1kmほど走ったところで、山道を降りてくる3人組がなにやらしゃべりかけてくる片言のフランス語で「フランス語しゃべれないよ」というと、「エンド・・・メテオ・・・」と、彼らも片言の英語を返してくる。どうやら悪天候でレースが中止になり、応援の人々が山を下りてくるようだった。

世界58カ国から2000人以上の参加。中には1年間をリベンジに賭けたトップ選手もいたことだろう。そのレースをあっさり中止。自然の中のスポーツなのだから、そういうことはある。頭ではわかっている、その実行は難しい。潔くレースを中断した主催者に感動した。

全部の撮影クルーが宿舎に戻ってきたのが深夜0時。選手も不完全燃焼だろうが、撮影班も不完全燃焼だった。たがいに自分が撮った動画を見せ合いながら、レースを振り返った。中止ポイントにいった六花さんは、エイドに戻ってみると、やり過ぎたはずのトップ選手がすべていて、しかも鍋木選手が嗚咽を漏らしながら泣いている。なんだか訳が分からないが、とにかく彼らの映像を撮り続けた。その隣で淡々とインタビューに応じながら泣きじゃくる鍋木選手を抱いて慰めているフランスのトップ選手セバスチャンの姿が印象的だった。

160km、46時間の制限時間で行われるこの大会、翌日、中間手前のクールマイヨールからのリスタートがあるのではないかと、中止の知らせを聞いた時思った。唯一の問題は、クールマイヨールまでの輸送である。2000人を輸送するとなるとバスが40台は必要だ。いくら観光地と言えども40台のバス確保は難しいように思えた。

翌朝、ゆっくりおき、コーヒーを飲み、街に出かけると、鍋木さんのサポートに行きあった。すでに朝10時にクールマイヨールからのリスタートが行われたという。昨晚遅くにレースが中止

され、翌朝いきなりのスタート。こういう状況にも柔軟に対応できてこそこのトレランレースだという主催者の暗黙のメッセージが伝わってくる。

ロジスティックスの問題解決は、想像もしない裏技だった。1000人分だけバスを用意したというのだ。日本なら、あぶれた参加者のクレームが怖くて、できないんじゃないだろうか。1000人のクレームよりハッピーになった1000人の方を彼らは見ている。

多くの人は残念ですね、と語りかける。選手には申し訳ないが、僕はそうは思わなかった。減多にない意思決定の現場に遭遇し、裏技とも言えるべき対処法を見た。世界一華やかなトレラン大会を支える世界一の舞台裏を垣間見ることができたのだから。

その日の午後、コース途中で日本人の応援に出かけ、多くのトップ選手がそれでも走っているのを見てみると、自分も走りたくなる。三好礼子さんをそのかして、川沿いの5kmほどを峠まで選手に前後しながら走った。ゼッケンも付けていないのに、人々が応援してくれる。これが、モンブランの魅力であり、スポーツ文化の違いなのだろう。オリエンテーリングやトレランを通じて、そういう文化を育てていきたい。



UTMBのゴールでは、競い合った選手どころか途中応援を送った家族たちが手をつないでゴールするシーンが見られる。

9月7日

東京へ。広告代理店との相談の後、トレーニングの伝道師を名乗る山本さんと一緒にキザニアのスタッフと会った。キザニアとは、こどもの職業体験をテーマパークにしたような施設で、それがアウトドアにも興味を示しているという山本さんの紹介だった。アウトドアだと仕事には直結しないが、それでもいいらしい。ナビゲーションとはオリエンテーリングとか、どうからめますかねという話をしながら、そうだ、カバーストーリーに山岳救助はどうだろう。父母がGPSと発信機を持って山の中に隠れている。それを子供たちが探すミッションを与えられ、GPSの使い方や地図の読み方を習いながら救出する。なんか、冒険チックで

面白そう。

その後は、JOAで総務会。

9月8日

松澤、稲葉という二人の大型「新人」の加入で、今年の静岡 OLC はクラブカップを大きな目標にした。自分としてもひそかに燃えるものがあった。2週間、計4回のスピードトレーニングをした。まずは、ビルドアップからだ。約70分。後半4kmを4:30ペースで。少しづつスピードあげると気持ちよく走れるものだ。

9月11日

帰国後、ダッシュで朝霧の準備とロゲイニングの準備をしたせいで、疲労もピーク。午前中全く頭働かず。富士山麓ロゲイニングの準備中も、暇があるところ。ところがエバニューの上原さんが視察にいらして、明日の地図がいかにすごいかという話になった途端、頭が覚醒した。自分にとって最大の薬は地図なのか？夕方の設置では、数回の高強度トレーニングの成果か、気持ちよく走れるではないか。トレーニングは裏切らない。

9月12日

富士山麓ロゲイニング。100組の定員はあっという間に埋まるだろうと、正直たかをくくっていた。結局別定員だった3時間の部を合わせて100組強。オリエンティアが3時間ロゲイニングに相当数出場していたが、6時間の部への出場は数えるほど。一方、霧ヶ峰あたりに参加するロゲイナーの参加は乏しい。彼らはどうも本格的なナビゲーションには今一つ興味がないらしい。実際、前日のナビゲーションクリニックも、定員の充足率は60%に達しなかった。また静岡オリエンテリングが主催しているミドルの方は100人強の参加があり、そこには20名程度のロゲイナーが参加しているが、翌日のスプリントの参加数は30弱。マーケットのニーズがどこらにあるかが、図らずも理解できた。

このイベント最大の収穫は「パーミー」ちゃんたちに会えたことだ。11月に開催されるニュージーランドの世界選手権、日本からの出場選手のほとんどは日ごろ関係のある人たちだが、若い女性3人からなる「パーミー」には全く面識がなかった。そのうち二人が交流会に来ていた。彼女が主催するmixiの「ロゲイニングにはまる」では、すでに70人以上の登録があるとか。

沖縄のがじゅまる自然学校のSさん、今年11月から来年3月にかけて、3イベントを行政の助成で開催できる見込みだという素敵な情報を持ってきた。

スポーツで地域起こしなんて目新しいもないが、ロゲイニングは掛け値なしにそれができる数少ないスポーツである。3連戦の最後は石垣島全島を使う。僕らの知らないところで、盛り上がっていること自体、ロゲイニングが本当に普及しつつある証なのだろう。そこにはオリエンテリング普及のヒント、オリエンテリングのブランディングの格好の舞台、トップ選手のプロモーションの場、オリエンテリング界の今に欠けている多くのものを見つけることができるはずだ。



「ロゲイニング」にはまったパーミーちゃんたち。彼女たちをひきつけるものは一体なんなのだろう。そこにはブランディングのヒントも、トップ選手養成の秘密もあるのではないだろうか

9月16日

アジア大会の開催の要望書を持ってJOCを訪問する。受け取った総務の職員は終始硬い表情。そりゃあ立場上何も決定的なコメントも言えないだろうが、もう少し対応の仕方があるんじゃないの、と思う。

学連幹事の斎藤君と山西会長の会談に付き合う。少しづつだが、双方の理解は進みつつある。

9月18日

クラブカップは当然として、土曜日にも出る気になったのは、この日スプリントとクイックOが行われたからだ。クイックOは藤島君のデモを森林公園のロゲの時経験した。もちろん簡単なのだが、スピードを競えば、オリエンテリング（特にスプリントの基礎練習）としては十分に有効な気がする。ならば本格的なクイックOをちゃんと経験しておきたい。

クイックOはミスはなかったが、やはりスピードに欠け、12位かな？「老獺なだけでは成績はでないようです」とアナウンスされる。ほっといてくれ、老獺さすら発揮できなかったぜ。

9月19日

静岡オリエンテリングクラブからは、2チームが出場する。前夜のミーテ

ィングではAチームが真剣にレース展開を話し合っている脇で、Bチームは酒盛りになっている。このあたりの雰囲気は社会人クラブらしいところだ。

Aチームの選手の頭には「優勝」の文字も浮かんでいるようだが、走順の順に選手の話の聞いていると、正直、この展開では優勝は無理だと思う。田濃・和久田・平井の3枚がそろえばトップかそこからせいぜい1-2分以内で4走にわたるだろう。だが、制限選手が投入される4、5走と言えども稲葉、若山では正直よくてトップと8分、悪ければ12分くらいの差が広がるだろう。例年上位の1、2チームは独走態勢に入るが、僕と松澤がどんなに頑張っても、5-6分詰めることができれば上出来。現実的な目標は3位というところだろう。

これは、トップから離された時の萎えと焦りを打ち消すためのリスクマネジメントだったのだが、レースもその通りになった。ただ一つ予想外だったのは、上位チームはエースと準エースをそろえた6-7走で予想外にタイム差がついた点だった。おかげで、僕の6走で、十分3位が狙える位置についただけでなく、7走松澤でもあわやという接戦を展開することができた。

短い時間での準備を考えると上出来だった。オリエンテリングの面白さを久しぶりに堪能できた40分だった。

9月23日

地元スポーツショップのトレラン部の初行事で、安倍川流域のトレランイベントのコース下見に出かけた。まっとうなコースになりそうな場所は他のグループに任せて、僕は「ボディーガード」と大回りのコースの検討に出かけた。北側の尾根にはきれいな林道が伸びていたが、その先は険しくやぶがちでイベントは無理だった。まっとうな部分は他のチームの報告によるとまずまずのルート。ここをぐるっと一周したら、結構楽しいトレイルになるんじゃないだろうか。

25日の土曜日は、いてもたってもいられず、そのコースの下見に出かけた。前半の登りはきつく、部分的には危険ですらあった。自分が出たら絶対後悔するか、悪態をつくかのどちらかだろう。ところが、山頂にあがると開けた植林地に踏み跡もない尾根がつながっている。そこから先はハイキング道あり、しっとり落ち着いた林道あり、静岡が一望のもとになる山上の自然公園あり。このレースが世に出た暁のキャッチフレーズはno pain, no gainだな。(村越 真)